

学び合いの中で思考力・判断力・表現力を育む音楽学習

1 音楽科で願う豊かな学びの姿

今日の授業では、はじめのふしと終わりのふしをつくったんだけど、ぼくたちの班は、Bさんが選んだりリズムが最初のリズムで、ぼくが選んだりリズムが終わりのリズムです。楽しかったです。(児童A)

普段、普通にしゃべる言葉をこうしてリズムにのせてすると、しゃべる言葉がもっと魅力的になったように感じました。音楽の力って不思議だなあと思いました。(生徒A)

日々の授業や校内音楽会などの音楽活動において、次のような子どもたちの姿を見ることができた。

	子どもたちの様子
初等部前期	<ul style="list-style-type: none"> 言葉に自分でメロディを付けたり、蝶を見て「ちょうちょう」を歌ったりする姿 見つけた遊びの中で楽器遊びをする姿 自分の気持ちを自由に表現する姿 無邪気に大声をはりあげて歌う姿 友だちの打つリズムを真似る姿 音楽に合わせて体を動かしながら歌う姿 口を大きく開けてのびのびと歌う姿
初等部後期	<ul style="list-style-type: none"> 友だちと一緒に声や音、リズムを合わせて楽しむ姿 音や音楽に耳を傾け、想像しながら鑑賞する姿 ソプラノリコーダーに興味をもち、一生懸命練習する姿 リコーダーを友だちに教える姿 美しい声にあこがれをもちながら、曲にひたって歌う姿
中等部	<ul style="list-style-type: none"> 音や音楽を聴いて直感的に感じたことを言葉にして伝え合う姿 ハーモニーに耳を傾け、その心地よさを感じながら歌い合う姿 声の響きやハーモニーを確認しながら自由な雰囲気の中で歌い合わせることを楽しむ姿 より響きのある歌声を求めて練習する姿

また、授業の枠を超えて、休み時間などにも音楽を楽しむ姿や音楽に親しむ姿が見られた。例えば、移動教室の際に友だちと一緒に廊下を歌い合わせながら歩く姿や授業前に友だちが弾くピアノの周りに集まってその演奏を聴いている姿などが見られた。さらに自己の確立とともに自分と音楽のかかわりを発見し、将来的にも楽しんでいこう、音楽にかかわる道に進んでみたいと思う児童・生徒も多く現れるようになった。このような姿は「音楽活動の楽しさを体験することを通して、音や音楽への興味・関心を高め、音楽によって生活を明るく豊かなものにし、生涯にわたって音楽に親しんでいく態度を育てる」という中学校第2学年及び第3学年の目標(1)が、着実に達成されつつあることを示すものである。

以上のような子どもたちの姿をもとに、11年間一貫して大事にして育てていきたいことを次のようにまとめた。

無邪気に音楽を楽しみ、心をわくわくドキドキさせ、あこがれをもって「音楽っていいなあ」「表現するって気持ちいいなあ」と純粋に感じる心と豊かな表現力。

そして、音楽科で願う豊かな学びの姿を次のようにとらえた。

- 音楽活動に進んで取り組もうとする姿
- 仲間と一緒に楽しく活動しようとする姿
- 音楽活動の楽しさや感動を味わおうとする姿

- 表現や鑑賞に必要な知識や技能を身につけようとする姿
- よりよい音楽表現にするために工夫しようとする姿
- 音楽を生活の中に取り入れようとする姿

2 昨年までの研究の経緯

(1) 子どもをとらえるという視点での取り組みからわかったこと

平成20年度は、子どもをとらえるという視点で、「歌唱」に焦点をあてて取り組んだ。時間ごとのふりかえりや自分の表現を聴く場とお互いの表現を聴き合う場を設定したり、教師によるとらえを子どもたちに積極的に伝えたりした。録音した歌声や表現を聴かせるなど、子ども自身がハーモニーや声の響きなどを客観的に見つめていく営みを充実させることにより、「正しい音程で歌えた」「ハモることができた」などの子どもたち自身での気づきが増した。そして、その瞬間に感じた子どもたちの気持ちが次の学びの豊かさにつながっていった。

(2) 音楽科における思考力・判断力・表現力

平成21年度は、新学習指導要領の内容を深く読み取り、キーワード等を領域（歌唱・器楽・創作（音楽づくり）・鑑賞）ごとの表にまとめていく作業を行なう中で、音楽科における「思考力・判断力・表現力」を次のようにとらえた。

◎思考力「イメージする・理解する」

「音（音楽）を聴いてイメージをふくらませる」「楽譜を見て理解する」など

◎判断力「選ぶ・工夫する・修正する・感受する」

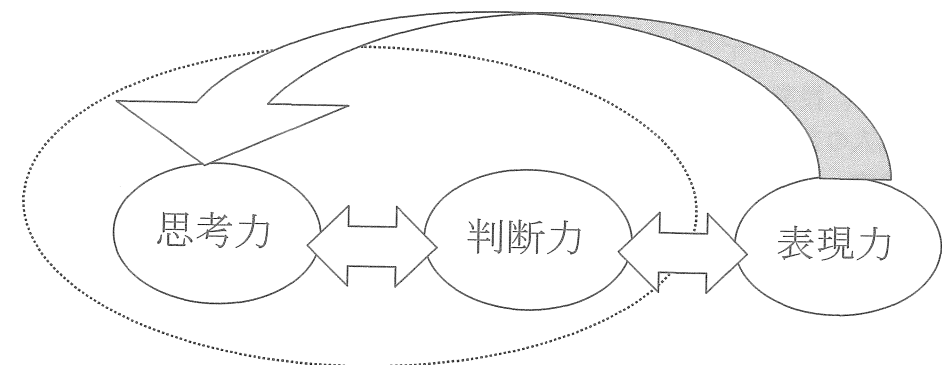
「音素材や音楽を形づくっている要素を選ぶ」「表現を工夫する」など

◎表現力「生かす・表現する」

「音楽を形づくっている要素を生かす」「思いや意図を演奏や言葉で表現する」など

「思考力」とは、一般的に論理的思考力（物事を論理的に考える力）ととらえられることが多い。しかし、「思考力」には創造的思考力もある。創造的思考力とは、一般的に流暢性（考えをすらすらとよどみなく作り出す）、柔軟性（いろいろな角度から柔軟に考える）、独創性（新奇な考えを生み出す）を中心として、応用性、構想性、感性性を兼ね備えた「考える力」のことである。まさに発想力・想像力（イメージ力）に通じ、音楽科でいう「思考力」とは創造的思考力の関与するところが大きい。「判断力」は、イメージしたものを表現へとつなぐ役割を果たしており、イメージしたものを表現するために、どの音素材や「音楽を形づくっている要素」を用いるか選び、工夫し、修正する力である。また、ある音や音楽を聴き、イメージをふくらませる（思考する）中で瞬時に自分なりにその音や音楽を感受する（判断する）ことが多々ある。このように思考と判断は分かれることなくひとまとまりでくることができ、「表現力」は、技能的側面を用いながら判断した音素材や「音楽を形づくっている要素」を生かし、思いや意図、イメージを表出していく力である。

また、「思考力・判断力・表現力」のサイクルは、「思考力」から「表現力」への一方通行ではなく、それぞれの間を行き来しながらより高い段階へと発展していくものととらえた。



(3) 思考力・判断力・表現力の育成に有効であったかかわり合い

昨年度は、創作活動に焦点をあてて、11年間を見すえたかかわり合いを大切にしたい指導のあり方を探った。初等期前期ではリズム中心の音楽遊びから、初等期後期ではそれをつなげたり重ねたりするとともに、音楽的な構成も大事にしながらの音楽づくりへと発展させた。さらに中等期では旋律や和声も考えた創作へと発展させた。試行錯誤したり、友だちとの意見交換から新たな気づきが生まれたり、お互いの思いや意図を共有したり共感したりしながら、表現したい思いや意図を音へ、そして音を音楽へと一つの形あるものへと練り上げていく過程を大切にしながら取り組んだ。具体的には、友だちのリズムを真似したり、イメージしたことをペアまたはグループで伝え合ったり、話し合ったりというようなかかわり合いをくり返し設定した。また、子どもたちのかかわり合いをより深いものにするために、共通のイメージをもたせたり、共通の「音楽を形づくっている要素」を設定させたりして、子どもたちが何を工夫すればいいのかを明確にするようにした。このことにより、子どもたちの思考力・判断力・表現力を高めていく学びにつながった。

3 本年度の研究

(1) 思考力・判断力・表現力についての11年間のつながり

一貫教育という視点から、音楽科ではそれぞれの発達段階での思考力・判断力・表現力を次のようにとらえている。

初等部前期	音楽を感覚的にとらえ、音楽やその演奏の楽しさを感じながら表現する力
初等部後期	思いや意図をもって、曲想にふさわしい表現を考えたり、自分や友だちの考えを生かしたりしながら表現する力
中等部	自分の表現意図を曲想とかかわらせ、知識〔共通事項〕・技能を活用して表現する力

初等部前期での思考力・判断力は、感覚的に音楽をとらえる力が主であり、これがその後の学びの姿のベースになっていく大切な部分であると考えられる。そして徐々に感覚的なものに自分の思いが加わっていき、初等部後期では思いや意図を明確にもたせるようにし、自分と他者の考えや表現を比較させながらより思考を高い段階へと発展させていく。さらに中等部になると自分の表現意図を曲想とかかわらせ、これまでに学んだ知識や身につけた表現の技能を活用して言葉や演奏で表現させていく。このように初等部前期から中等部までの発達段階における思考・判断の違いやつながりを意識すると共に、一貫教育における積み上げを大切にしたい学習活動を展開していくことが重要である。

(2) 思考力・判断力・表現力を育てるための授業づくり

今年度は、思考力・判断力・表現力を育て高めていくための具体的な方策として、学級全体での学び合いを活性化させる授業の展開を模索する。そこで、次に述べる①～③について重点的に取り組んでいく。

①興味・関心をひきつける教材選択と提示の工夫

同じ年齢の子どもたちでも個々の音楽体験や経験はさまざまである。そのような音楽的体験や経験の差がある子どもたちに対して、できるだけ全員の興味・関心をひきつけるような教材選択や提示の工夫がまず必要である。授業のスタートにおいて全員を同じ土俵に上げるということである。学級全体での学び合いが、個人の音楽経験に過度に左右されることのないようにすることが大切であると考えられる。

②共通の課題設定

共通のイメージやことばを提示したり、共通の「音楽を形づくっている要素」を設定したりして、子どもたちが何をどのようにすればいいのか明確にしてやる。共通のことばとして、例えば〔共通事項〕をベースにした「音楽表現カード」や「音楽記号カード」のようなものを作成し、すぐに活用できるようにする。また、「わくわくする感じがするのは、なぜだろうか」「この雰囲気は、音楽のどこからくる

のだろうか」「どのように工夫したら自分の思いが伝えられるだろうか」などといった教師のはたらきかけも重要になってくる。

③学級全体での学び合いの場面の設定

個やペア、グループで取り組んだ内容や成果を学級全体に発表させ、それぞれが感じたことや表現したいことなどを伝え合ったり、よさを認め合ったりするという場を設定する。その際、例えば「グループ」→「全体」で終わらず、「グループ」→「全体」からさらに「グループ」というように「行きつ戻りつ」させることが大切であると考えられる。この「行きつ戻りつ」の繰り返しを「往還」とよび、重視していきたい。また、「個」「ペア」「グループ」「全体」の組み合わせは、子どもたちの実態（発達段階、意欲、音楽の体験度など）や学習のねらいなどによって違ってくると考える。

以上3つの点をふまえ、本年度は、鑑賞の活動に焦点をあてて、学び合いを活性化させる授業のあり方を模索していきたい。今般の学習指導要領改訂の主要なポイントとして、Ⅰ. 指導内容の全体構成を見直すこと、Ⅱ. 創作と鑑賞の指導を改善充実すること、Ⅲ. 我が国の音楽の指導を充実することがあげられている。これらのうち、Ⅱ. について、昨年度、創作・音楽づくりを中心に研究を行ったことは上述のとおりである。今年度は、小学校においては移行期最終年度であり、来年度からの完全実施にむけて、もう一方の鑑賞の活動に、特に取り組もうとするものである。

また、新しい学習指導要領では「言語活動の充実」が標榜されている。児童・生徒が音楽を聴き、楽曲の特徴や演奏のよさなど、思考・判断したことを言葉で表すことによって、自らの学びを確かめることができる。さらに、学習集団を構成する仲間に対して伝え合うことで、学びの質を互いに高め合うことにつながっていく。

鑑賞の活動は、表現の領域における活動と比較すると、これまで、やや個人的な学習活動に偏る傾向があったことは否めない。その意味において、「学び合いの中で思考力・判断力・表現力を育む音楽学習」というテーマは、鑑賞においてこそ、その真価が問われるといっても過言ではない。

音楽科における4つの評価の観点のうち、直接的に鑑賞に関わる観点は、1. 音楽への関心・意欲・態度、および4. 鑑賞の能力である。後者については、今回の改訂にともなって、これまでの評価の観点のひとつであった「音楽的な感受や表現の工夫」のうち、「音楽的な感受」に該当する力もこの観点でみることとなった。思考・判断の基盤となる、新設の〔共通事項〕をふまえ、音楽的な感受を有機的に結び付けていくことのできる授業の展開を模索したい。

4 成果と課題

発達段階に応じて、初等部前期を土台として中等部までに積み上げていきたい力をより具体的にイメージすることができてきた。こうした力をさらに伸ばすためには、学習場面における学び合いが重要であり、授業の中でいかに生み出し深めていけるかが課題である。また、その際の教師のはたらきかけについてもさらに追求していきたい。

(文責 小村 聡)

【主要参考文献】

大熊信彦「音楽科の移行期最終年度の実践課題とその対応」『初等教育資料』平成22年4月号 (No.859)
津田正之「音楽科における指導要領改善のポイント」『初等教育資料』平成22年6月号 (No.861)
伊野義博「思考・判断し、表現する一連のプロセスの実際と展望」『中等教育資料』平成22年8月号